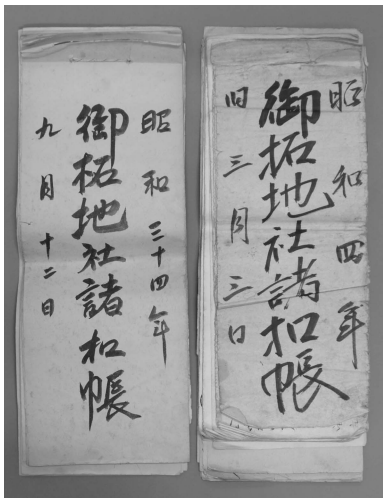
新編 知立市史だより

第８号

新造された御拓地大明神



「御拓地社諸控帳」

八橋町の御拓（おたくち）地大明神はおしゃぐちさんと呼ばれ、地域の人により祀られています。
風雨・シロアリ被害・老朽化のため寄付をつのり、本年建て替えられました。６月11日に旧社から遷座（御神体移動）、６月18日に地鎮祭、８月17日に遷座・新社落成式、９月10日に祭礼が行われました。地域には２冊の「御拓地社諸控帳」（昭和４～33年・昭和34～56年）が残されており、昭和40年代まで行われていたシコ（にんじんごはんの共同飲食）の材料や寄付などがわかります。また、解体した社殿から旧社の寄付者名が書かれた板が出てきました。信仰が脈々と受け継がれていく様子がうかがえます。

知立市

2017.10.16

知立市初の近現代資料集、刊行!!

『新編知立市史6　資料編　近代・現代』を刊行しました。

現代社会の基礎を築いた明治・大正、戦争を契機とする激動の昭和、そして平成へ。当時の知立の姿や関連する人々の軌跡を明らかにするため、約八年にわたり膨大な資料調査を行いました。

その成果を踏まえ、各時代の行政や教育・産業・生活・文化のほかに明治用水や鉄道・道路の交通網整備、度重なる戦争など、多岐にわたる特徴的なテーマを取り上げています。新発見資料や従来あまり注目されなかった資料を多く用いて、わかりやすい解説とともに知立のあゆみを紹介します。

目次

第一章　近代知立の出発
第二章　一町三か村時代の知立
第三章　新しい知立町の成立と展開
第四章　戦争と知立町
第五章　戦後の知立町
第六章　知立市の誕生と発展

刊行記念講演会を開催しました

新編知立市史第四回配本となる『資料編　近代・現代』の刊行を記念して、七月十五日に知立市文化会館（パティオ池鯉鮒）において講演会を開催しました。

講師は、近代・現代部会の山田孝先生と伴野泰弘先生です。先生方はそれぞれ詳細な講演資料を作成してくださり、わかりやすい講演をしてくださいました。

■講師（講演内容は三頁をご覧ください）

・山田　孝　氏（刈谷市文化財保護審議会会長）
「戦後の知立の人々の足跡から考える」

・伴野泰弘氏（元名古屋文理大学短期大学部教授）
「碧海郡における行政区画の変遷
―明治期における知立市域を中心に―」

『新編知立市史』は、市役所市民課の窓口または歴史民俗資料館でお買い求めいただけます。
郵送（送料別）もできますので、詳しくは知立市ホームページの、

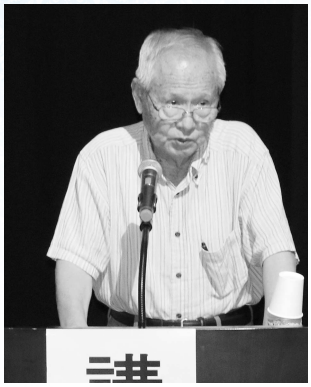
「組織から探す」
↓
「文化課」
↓
「知立市歴史民俗資料館」
↓
「刊行物案内」

のページをご覧ください。

講演内容

（文責　事務局）

■「戦後の知立の人々の足跡から考える」　山田 孝氏



山田先生は、戦後の知立の動きについて講演してくださいました。最初に「アジア・太平洋戦争敗戦直後の知立」というテーマで、終戦直後の資料が極めて少ない中、地区と学校の動向について解説されました。

次に講演の中心テーマである「合併問題から知立市誕生へ」についてお話されました。昭和三十年代以降、知立では社会基盤の整備が急速に進められました。第一に新駅設置と名鉄本線・三河線の連絡線敷設工事の必要性から昭和三十年に知立最初の都市計画土地区画整理事業が施行されたこと、第二に昭和三十七年、町の発展は人口増にあるとして、工場誘致から団地誘致に切り替え、翌年に団地誘致を決定したこと。このような動きと同時に起こってきたのが合併問題です。近隣自治体、特に刈谷市との合併問題をとおして単独市を目指すことになった知立町にとって、知立団地の誘致による人口増加、地方自治法の一部改正により、昭和四十五年に知立市誕生が実現しました。「その後の知立市の発展」については、ごみ問題や教育・文化施設の整備・充実などの説明がありました。

最後に山田先生は、知立の近代・現代史は知立市民の皆様の歩いた足跡といえるというお言葉で講演を締めくくられました。

■「碧海郡における行政区画の変遷」　伴野泰弘氏

―明治期における知立市域を中心に―

知立市域の特質を見いだすにあたり、明治期の碧海郡における行政区画の変遷に注目されました。変遷は次の六期に区分できます。①幕末維新期、市域は刈谷藩領（三か村）と重原藩領（六か村）で二分され、重原藩領が多くを占めていました。②明治五年に行政区画として大区と小区が設置され、同八年まで二度の小区再編が行われました。③明治九年、安場保和県令（けんれい）は、地租改正（ちそかいせい）事業のため大区小区を廃止して十八区制を実施しました。④明治十一年の郡区町村編制法により、行政区画として郡と町村が設置されますが、従来の小区は「部」と名称を変え地租改正事業などのために活用されます。⑤明治二十二年の市制・町村制施行により、市域では知立町・上重原村・長崎村・牛橋村が成立。⑥明治三十九年の大合併により、郡内は一六町村となり、市域では右記一町三か村（大字篠目を除く）の合併で新知立町が誕生しました。行政区画の変遷は国の政策・情勢の影響を強く受けていました。

また伴野先生は、自治体史編さんと資料編の意義について、人が生きていく上で身近な地域の歴史が手助けになること、資料編は永く残ること、歴史学は史資料が根拠であり、史資料を保存・公開・確認できるようにしていくことが一番大切だとお話されました。

知立神社の陽祭と陰祭

「知立まつり」は知立神社の祭礼で、一年おきに本祭（ほんまつり）と間祭（あいまつり）が行われます。本祭では豪華絢爛な五台の山車（だし）の上で文楽（ぶんらく）とからくりが上演され、間祭には五台の花車（はなぐるま）が奉納されます。この本祭と間祭は、近世に「陽祭」と「陰祭」と表現される隔年ごとの祭りの伝統に起因するものと考えられます。知立神社の別当寺院だった惣（総）持寺の僧侶亮円の日記には、「陽祭」と「陰祭」という表現が使われ、山車の宮入りやからくりなどが上演されるのが「陽祭」で現在の本祭、神事のみとなるのが「陰祭」で現在の間祭にあたります。

亮円の書いた記録によれば、陰祭には刈谷領主と刈谷の町から神馬の献上があり、陽祭には献馬がないことがわかります。陰祭の年にだけ刈谷城主と刈谷町からの献馬がみられるのです。『刈谷町庄屋留帳』をみると、刈谷町の市原稲荷神社祭礼後の四月三日（旧暦）に、刈谷領主と刈谷町から知立神社に献馬がされていることがわかります。しかも、その献馬は隔年ごとに行われる刈谷の祭礼年のみです。『刈谷町庄屋留帳』により市原稲荷神社の刈谷町祭礼執行を確認できる年、また知立の『中町祭礼帳』により知立町祭礼の執行を確認できる年にそれぞれ○印を付し比較したのが表になります。これによると、両祭礼は交互にそれぞれ隔年で行われていることが確認できます。『刈谷町庄屋留帳』における、天保十一年（一八四〇）以降の記録には、祭礼がない年については「市原稲荷陰祭につき神前において例年のとおり神楽を行う」とあり、陰祭は知立と同じように神事のみであるようです。これらから刈谷が陽祭ならば知立が陰祭、刈谷が陰祭ならば知立は陽祭の年となるのです。

『刈谷市史』によると、市原稲荷神社の祭りは宝永五年（一七〇八）から一年おきに行われるようになったとされていますので、同年以降、知立神社と交互の祭礼が始まったのでしょう。なぜこのような祭礼に関する関係ができたかについては判然としませんが、刈谷と知立の支配領主が関係していると考えられます。近世において刈谷町と知立町は同じ刈谷藩領です。『刈谷町誌』によると、市原稲荷神社は永禄五年（一五六二）刈谷城の隅に神殿が建てられ歴代城主の尊信が厚く、万治元年（一六五八）九月領主稲垣氏の代に現在地に遷座したといいます。刈谷城主の御膝元として発展した刈谷町に対して、東海道の宿場として発展したのが知立町です。藩領における二つの町に対し領主が対等共存の位置付けをしたのが祭礼の交互執行でないでしょうか。

和暦	西暦	刈谷祭礼	知立祭礼
文政８年	1825	○	
９年	1826		○
10年	1827	○	
11年	1828		○
12年	1829	○	
天保元年	1830		○
２年	1831	○	
３年	1832		○
４年	1833	○	
５年	1834		○
６年	1835	○	
７年	1836		○
８年	1837	○	
９年	1838		○
10年	1839	○	
11年	1840		○
12年	1841	○	
13年	1842		○
14年	1843	○	
弘化元年	1844		○
２年	1845	○	
３年	1846		○
４年	1847	（欠本）	
嘉永元年	1848		○
２年	1849	○	
３年	1850		○
４年	1851	○	
５年	1852		○
６年	1853	（欠本）	
安政元年	1854		○
２年	1855	○	
３年	1856		○
４年	1857	○	
５年	1858		○
６年	1859	○	
万延元年	1860		○
文久元年	1861	○	
２年	1862		○
３年	1863	○	
元治元年	1864		○
慶応元年	1865	○	
２年	1866		○
３年	1867	○	
明治元年	1868		○

『刈谷町庄屋留帳』と『中町祭礼帳』より作成

（近世部会　調査執筆委員　堀江登志実）

新編知立市史自然編刊行に向けて

知立市史自然部会では、平成29年度の自然編刊行に向けて原稿の提出を終え、図表一覧、キャプション、文体の統一などの編集作業を進めているところです。

自然部会は、地形・地質、気候・気象、動物、植物の各分野から構成されており、それぞれの分野が独立して作業を進めてきました。年間約4回の会議が行われ、その都度知立市史編集委員会にも報告してきました。自然部会では、その間、各分野での進捗状況を把握するため、2回の中間発表会を知立市図書館で開催し、多くの市民の方々にも知立市の自然の現状を報告してきました。

知立市は、約16平方kmの狭い市域ですが、特徴ある地域性が確認されています。地形的には、大部分が碧海面の段丘上にあり、逢妻川や猿渡川、および支流の吹戸川沿いが沖積低地から成っています。碧海層に含まれる貝殻分布から、12万5千年前の海進規模は、縄文海進（7千年前）よりも大きかったようです。

知立市の植物は、一九七三年に大原準之助が750種類の野生植物の存在を「知立の植物」と題して報告していますが、今回の新編知立市史ではシダ植物、帰化植物、水草類、巨木・銘木など約730種類を確認しています。カキツバタ湿地（八橋町）では、絶滅危惧種のオオアブノメも確認されました。動物分野では、環境省の絶滅危惧1B類、愛知県絶滅危惧Ⅱ類のナゴヤダルマガエルをはじめとする貴重な動物の生息が確認されています。

しかし、近年の地球温暖化に伴い、ツマグロヒョウモンのように新たに知立市域に進入してきた蝶の存在も確認され、外来生物による動物相の変容も否定できないのが現状です。かつて、中部地方は温帯の気候帯に所属していましたが、一九七〇年代の後半に起こった気候シフトによって亜熱帯化してきています。その結果、緯度で5度（約500km）気候帯が北上し、中部地方も九州南部や沖縄と変わらない気候帯になってきました。

このため、中緯度偏西風（亜熱帯ジェット気流、寒帯前線ジェット気流）が北上傾向にあり、冬季は温暖化してこの地域特有の局地風「伊吹おろし」の吹走頻度が減少してきています。しかし、日本海の海面温度上昇で雪雲に含まれる水分量が多くなり、関ケ原を越えて雪雲が知立市域にまで流れ出しています。また、低気圧の中心が三陸沖に達すると強い冬型気圧配置となり、伊吹おろしの風道にあたる知立市域でも風速が8.0m/sにも達し、身体で感じる寒さの指標である酷寒指数が知立市北西部では2.4～2.6となり、北海道網走市の1月の寒さに匹敵します。

亜熱帯の北上によって、近年の猛暑（日最高気温35.0℃）が現れやすくなっており、東海地方は特に異常猛暑になりやすい地域です。これは、南高北低の気圧配置で南西風が鈴鹿山脈を越えてフェーン現象をもたらすからです。このような気圧配置では、知立市域のほとんどが36.0℃以上の猛暑となり、特に名鉄本線の牛田駅周辺では37.5℃が観測されました。最終的には、知立市域の学区単位での気候環境評価を行いました。

来年春には新編知立市史自然編が刊行されます。ぜひ身近な自然環境をご確認ください。

（自然部会　部会長　大和田道雄）

在原寺所蔵釈迦涅槃図の下絵について

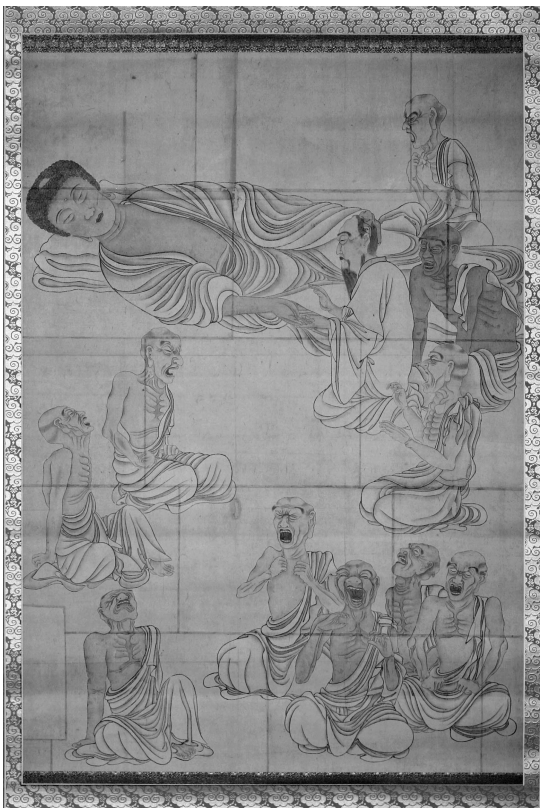
在原寺（八橋町）の釈迦涅槃図については、法隆寺五重塔の塑像をもとにした谷文晁筆の涅槃図と関係の深い仏画として、すでに「新編知立市史だより第六号」でご紹介したところですが、最近この涅槃図ととてもよく似た涅槃図が、岡崎市鴨田町の九品院で確認されました。

九品院所蔵の涅槃図も、掛軸装です。ただし小さな紙を細かく継いだ画面で、本格的な絵画のための体裁ではありません。しかもよく見ると、軸装される前に長く畳んだままにされていたようで、折りシワや埃・虫食いの跡があります。さらに確認すると、粘りのある濃い墨で素早く引いたように、墨の線が随所でかすれています。どうやらこれは作品を仕上げるための下絵、それも手本となる絵の上に紙を敷いて転写した、いわゆる敷き写しの下絵であったようです。裏移りしにくい粘りのある墨で、素早く線が引かれたのは、下敷きにした手本を汚さない配慮です。

試みに在原寺と九品院、二つの涅槃図に描かれたモチーフの大きさや距離を細かく計測すると、両者はほぼ一致します。在原寺の涅槃図は、九品院の涅槃図を下絵として制作されたとみて間違いありません。どうやら在原寺の涅槃図を制作するために、その手本となった名古屋市博物館所蔵の谷文晁筆涅槃図から敷き写したものが九品院の涅槃図だったようです。

谷文晁は工房のあった江戸で、涅槃図を文化元年（一八〇四）に完成させています。これを文化六年、江戸・日暮里の南泉寺一二世住職・西河元威が写し、知立で在原寺を再興した方巌売茶翁へ贈ったのが、在原寺の涅槃図です。南泉寺のご住職からのご教示によれば、西河は文化七年九月に亡くなっているそうです。筆者の没後、下絵はしばらく畳まれたまま死蔵されていたのでしょう。

本来、江戸にあるべき下絵は、なぜ岡崎へ伝来したのでしょうか。寛政八年（一七九六）、西河は南泉寺住職となり、これと前後して売茶翁も日暮里に住むようになります。これに先立つ寛政五年、後に九品院を創建する徳住が江戸・芝の増上寺に入山し、九年ほど修業しています。この時期に徳住は西河や売茶翁の知遇を得たのでしょう。三河で評判となった文晁創案の涅槃図の下絵を、その折のつてを頼りに取り寄せた徳住が、軸装に改めて九品院の什物としたのではないでしょうか。



九品院所蔵の涅槃図

（文化財委員会　委員長　鷹巣　純）

活動記録

（平成28年9月1日～29年8月31日）

編さん委員会
29年8／1

編集委員会
28年10／28
29年1／20、4／14、7／2

部会

考古部会
29年1／14、7／30
通史編の章・節・項の考案や、地図の作成を行っています。

古代・中世部会
28年9／2
29年2／24、5／12、7／2
各委員が資料編を踏まえて、通史編の章・節・項を考案し、会議で議論しています。

近世部会
28年9／4
29年1／13、3／7（打ち合わせ）、3／12、5／18、6／21（打ち合わせ）、8／20

史料調査
29年2／22・23（福島市）、6／29（在原寺）、7／20（刈谷市・半田市）、8／10（個人）、8／15（半田市）
29年度刊行の資料編に向けて、原稿の校正作業を進めています。

近代・現代部会
28年9／4、10／9、12／4
29年1／21、4／23、5／14、7／30
通史編に向け、資料編を踏まえて史料の調査・再検討を行い、議論を積み重ねています。

民俗部会
29年3／7（打ち合わせ）、3／15、6／9（打ち合わせ）、6／22

28年調査・聞き取り
9／18秋葉まつり、10月秋祭り関係

29年調査・聞き取り
1／14個人、1／21個人、1／26個人、2／5新地町祭礼、3／12西町、5／2・3知立まつり、5／23八橋町、5／27民具調査・個人、6／11八橋町、6／18八橋町、6／22個人、6／24個人、7／9個人、7／16個人、7／22個人、8／12弘法町、8／17八橋町、8／19個人、8／23文書調査、8／24個人
祭礼や聞き取りの調査を続けながら、原稿執筆を行っています。

自然部会
28年9／24
29年1／21、4／8、5／28

生物班
28年11／13動物担当打ち合わせ
29年4／18動物担当打ち合わせ、4／23植物担当打ち合わせ、4／29植物担当打ち合わせ
29年度刊行に向けて、文章や図・表の校正作業を行っています。

八橋グループ
28年9／17
29年3／14、6／23（打ち合わせ）
八橋に関する資料の、調査・収集を進めています。

お礼

市史編さん活動に、様々な所で様々な方々にご協力・ご教示を賜りました。心よりお礼申し上げます。
また、市史編さん係のホームページでは、最新の情報やコラムなどを掲載しています。ぜひ、ご覧ください。
「新編知立市史編さん」で検索

刊行予定

『新編知立市史4　資料編　近世』

平成三十年三月刊行（予定）
B5判五〇〇ページ　三一〇〇円（予定）

江戸時代の知立は、東海道の宿場町として賑わい多くの人々が往来していましたが、周辺の村にも活気や苦労がありました。本巻では宿場町・武家・村・文化のテーマごとに史料をまとめるとともに解説を付け、宿場町や村の様相およびその領主との関わりなどについて明らかにしています。

また、市内の寺社や各地域に伝来した史料以外に、県外に残る史料も掲載することで、多面的に当時の知立を紹介します。

『新編知立市史8　資料編　自然』

平成三十年三月刊行（予定）
B5判五〇〇ページ（オールカラー）
四七〇〇円（予定）

本巻は知立市初の本格的な自然分野に関する書籍であり、「地形と地質」「気候」「植物」「動物」の四分野で構成されています。長期にわたる調査・研究に基づいて執筆され、本市にとって初めて明らかにされたことや貴重な植物・動物種も紹介しています。

これらの研究成果は、都市化が進む市域の現状や問題点、および今後の在り方への指針を与えてくれる内容となっています。

好評販売中

■新刊

『新編知立市史6　資料編　近代・現代』
B5判（付図有り）　四一〇〇円

■既刊

『新編知立市史3　資料編　原始・古代・中世』
B5判二冊箱入り（付図有り）　四五〇〇円

『新編知立市史5　池鯉鮒宿本陣御宿帳』
B5判　二六〇〇円

『新編知立市史　別巻　文化財編』
A4判オールカラー　二六〇〇円

お問い合わせ

知立市教育委員会文化課市史編さん係
〒四七二―〇〇五三
知立市南新地二丁目三―二（歴史民俗資料館内）
TEL　〇五六六―八三―六七八九
FAX　〇五六六―八三―六六七五
E-mail　sisi-hensan@city.chiryu.lg.jp
ホームページもご覧ください
「新編知立市史編さん」で検索

新編知立市史だより第八号　平成29年10月16日発行
発行　知立市教育委員会文化課市史編さん係